

パトスの神話 ー 1 ー

ーロシア・ナロードニキ覚書ー

パッション Passion

1. 殉教、受難（古義）
2. The Passion ーキリストの受難
3. 病氣（古義）
4. 情念、情熱
5. 恋愛
6. 渴望の対象物

目次

I パトスの構造

II カリヤーエフと革命

ーハテロルVとハ愛V

III ネチャーエフと革命

ーハ悪V

IV 挽歌

ーそしてわたしは……

小田光雄

I パトスの構造

エロティシズムとは死に至るまで
の生の称揚である。

G・バタイユ『エロティシズム』

わたしの中で今こそロシア・ナロードニキのエトスは
あかされなければならない。

世界は、歴史はわたしたちに何を開示するのであろう
か。永遠に流れて行くことを止めない時間の暗闇の中に、
無限の埋没の裡に沈んで行く世界の中に、わたしたちは
何を視ることが可能なのであろうか。

世界と歴史とに囲繞されたハ場所Vに、個的存在は措
かれながら、その世界との、歴史との異差に苛立ちの彷徨
を繰り返しながら、時間の波間をただよい、転落して
行く存在の叫びはルフランとなって、わたしたちのハ場
所Vを包囲する。今ここにひとつの明証は打ち立てられ

なければならぬ。たとえそれが「数ある俺の狂気の物語のひとつ」(注1)だとしても、「現在」から、「個体」から、「時間」への、「世界」へのアリアドネの糸を見出すために、今ここにわたしは錯乱に満ちた心象を語らなければならぬ。

世界史とロシア史を、個的存在を自ら燃焼することによって照射し、横切って消えて行ったロシア・ナロードニキの人々の物語は、わたしたちに何を開示し、何を刻印し、そして如何なる位相のもとに時空をうって肉迫して来るのであろうか。

わたしたちは現在、数多くのロシア・ナロードニキ論を持っている。しかしその記述、分析とは、大部分次のような領域を越えるものではない。

▲ナロードニキは一八七〇年代から二〇世紀初頭に至るまでロシアの革命運動に重大な影響を与えた。その思想はツァーリズムに対する憎悪と農民に対する盲目的な愛情を基礎にしていた。しかしナロードニキの熱烈な革命的情熱にも拘らず、人民主義を一つの革命理論としてみるならば、次のような欠陥を持っていた。まず彼らが、革命の中心勢力は労働者階級ではなくて

農民であり、ツァーリと地主の権力は農民一揆のみで打倒しうると考えたこと。次に、しかも彼らの「人民の中へ」はいつていった努力は実を結ばず、農民は立ち上がらなかったで、やがてナロードニキが大衆を除外して革命の手段として個人のテロ行為に過大な期待をかけるにいたったこと」

(岩間徹編「ロシア史」)

あるいはまた、実際に日本の社会主義運動に献身し、ナロードニキ運動に造詣の深い荒畑寒村は、私的感情を混じえながらこう述べている。

▲彼らは理論的にも実践的にも、ボリシェヴィキに敗れたのであろう。だが、そんな勝敗の数などは長い革命史上の一小波瀾に過ぎない。彼らの熱烈な同胞愛、圧制と迫害に対する反抗と闘争、崇高な理想主義、犠牲と献身の殉道的精神は、一世紀近い年月を経た今日もなお、私たちの心に新しい感激の火を点ずるのだ」

(「ロシア革命運動の曙」)

だが、わたしにとってロシア・ナロードニキが問題になるのは、かかる歴史的視角からではない。わたしにと

って問題になるのは、ナロードニキの革命理論とか、その敗北の因果関係とかではなく、ナロードニキの人々があの帝制ロシアの状況のもとで、▲未来の地上の愛Vの実現するために▲革命Vと云うひとつの理想を生き、そしてその行為を通じて現実に参加し、めくるめく軌跡を描いたその背後に秘む「彼らの熱烈な同胞愛、圧制と迫害に対する反抗と闘争、崇高な理想主義、犠牲と献身の殉道的精神」(荒畑寒村)を支えたところのパッションの構造なのである。そしてロシア・ナロードニキの人々を歴史の呪縛から解放し、「ロゴス」の領域から、「パトス」の領域へ転位することによって、そのパッションの開示した内的世界を凝視することが、わたしの意図に他ならないのだ。

かかる視座から、歴史と世界を透視しようとするわたしの意図は錯誤に満ちているかもしれない。しかしわたしにとって、歴史と云うものが時空をうって迫って来るのは、ひとが何と云おうと、ある人間の個人史が世界と交錯し、そしてそこで生じた情念の磁場から放射され、激しい軌跡を描いて飛翔し、めくるめく死を受け取ることによって完結した存在が開示したところの世界による衝撃なのである。

わたしたちは歴史を時間的な流れによって把握するこ

とに慣らされている。しかしわたしたち個人にとって必要なのは、人間存在の内奥から視た歴史なのではないだろうか。この迷宮にも似た人間精神の内部まで侵入して、歴史と世界とをあらたな視座から凝視することが、「現在」を生き、「世界」に在るわたしたちに向けられた問いなのではないだろうか。

わたしにとって、ロシア・ナロードニキとはかかる素材に他ならないのである。だからこそ、わたしは先行するあまたのナロードニキ論に決して満足することはない。ナロードニキについての外在的要因と歴史的視角からの記述、分析は、もはやわたしにとって何の意味もない。そして「ナロードニキ主義はニヒリズムや無政府主義と同様、まことにロシア的現象である」(注2)との見解もひとまず置こう。

したがって、わたしのこれから行おうとする試みはいわゆる歴史ではないかもしれない。わたしが意図するのは、この人間と云う普遍的でまた謎に満ちたものの深部まで測鉛を降して、パッションの視座から、人間の秘めた精神の暗部に照明を与えようとする試みなのである。そして存在と人間・世界の異差の構造の裡に踏み込み、その射程を測定し、わたしと云う個的存在の裡から発生し、個人史の内的体験を通じて断片化され散乱し、そし

て結実して行った心象の果核を発条とすることによって、ロシア・ナロードニキのエトスを解明し、ひとつの象を与えたいと思う。

しかしこの試みの中で、わたしは語られている事象と化したロシア・ナロードニキの歴史から遠く離れて行かざるを得ないだろう。だがある意味では、これはわたしの個人的心象と世界・歴史に関するひとつの投企であり、わたしの描かれている人場所Vからの「世界」に対する固い掛けであり、私的報告書でもあるのだ。

まずパッションについて語らなければならない。パッションとは様々なニュアンスを含んでいる。それは古義では、「殉教」「受難」「病氣」であり、現代的には、「情熱」「情念」と云った意味を有している。これらの様々な意味から感じられるように。パッションとは決して静謐なものではなく、常にそれは過剰な、暴力的な形をとって表出する。そしてその過剰性と暴力性とは、存在を内奥から揺り動かし、存在自らをも破壊するまでの力を有している。しかしかかるパッションの過剰性と暴力性とは、人間存在の内奥にあって躍動し、生の原質を支えていることはだれも否定することは出来ないだろう。しからば、このパッションをパッションたらしめている

ど、その死の中に、二つの生きものの連続性の基本的な瞬間があらわれるのである」。

そしてこれと同じことが有性生殖の場合の精子と卵子にも云えるのである。「精子と卵子は、基本的な状態では非連続の存在であるが、それらが一つに結びつくことによって、ある連続性が二つのあいだに確立される。つまり、個々別々であった二つの存在が死に、消滅することによって、一つの新しい存在が形成されるのだ。新しい存在はそれ自身では非連続であるが、みずからの中に連続性への過程、二つの別個の存在のそれぞれにとって死であるところの、両者の融合という過程を含んでいるのである」。つまり非連続の存在が自らを喪失することによって、連続性に瞬間的に到達出来ると云うことなのである。そしてその連続性とは死によって開示されるのであり、わたしたち非連続の存在は、「失われた連続性への郷愁」を持っている。バタイユの一節を引いてみよう。

△死に至るまでの生の称揚とは、肉体のエロティシズムにおけると同様に心情のエロティシズムにおいても、死に対する挑戦、死に対する無差別な挑戦なのである。生とは存在への接近である。かりに生が死ぬべきも

過剰性と暴力性、そしてかかる性質を承知しながら、人間を常に行方へと、対象へと問わせずにはおかないパッションの構造とは、如何なる果核を有し、如何なる位相のもとに自己運動を展開するのであろうか。

わたしはこのパッションの果核こそエロティシズムと呼ぼう。ジョルジュ・バタイユは、その著『エロティシズム』の中で、「エロティシズムとは死に至るまでの生の称揚である」と云う定義づけを行っている。バタイユの云うのは、わがしたち個々の存在はひとりて生まれ、ひとりて死ぬのであって、ある存在と他の存在との間には深淵があり、非連続的なものでしかありえない。それが連続性に参加するのは性行為(生殖)の裡においてであると云うことである。

それは例えば、無性生殖の場合においては、単一の細胞が核分裂を起こして二つの新しい細胞が生じる時、初めの細胞は消滅する。そして新しい二つの細胞もそれ自体非連続的なものでしかありえない。しかし「ただ、生殖の瞬間にだけ連続性があつた。最初の一つが二つになる瞬間というものがある。むしろ、二つになってしまえば、二つの生きものはそれぞれに新たな非連続性が生じる。しかしその過程は、二つの生きもののあいだに連続性の瞬間を引き入れるのだ。最初の生きものは死ぬけ

のであるとしても、存在の連続性は死ぬべきものではない。連続性への接近、連続性への陶醉は、死を思い煩う感情を支配するのである。第一に、直接的なエロティックな混乱が、すべてを超越する感情を私たちにあたえてくれる。非連続の存在としての立場に結びついた暗鬱たる前途の予想も、忘却の中に沈んでしまう。第二に、若々しい生命に開放された陶醉の彼方に、正面から死に近づく能力、そして最後に死の中に、不可知な不可解な連続性への抜け道を発見する能力があらえられる。この能力こそ、エロティシズムの秘密であり、エロティシズムによってのみもたらされる秘密なのである」

(『エロティシズム』)

この自己否定、そして対象(行為)への埋没の中で死の横切りによって開示される連続性、そしてそれは至高の瞬間をもたらす。これがバタイユの云うエロティシズムなのである。

だがこれはかならずしも性の領域にのみ含まれる現象ではない。それが政治の領域に表出した場合にも、対象の位相こそ違っても同じことが云えるのではないだろう。そしてわがロシア・ナロードニキの人々の人革命V

への献身とは、何とこのエロティシズムに満ちてはいないだろうか。バタイユは、 $\wedge$ 性 $\vee$ や $\wedge$ 祝祭 $\vee$ や $\wedge$ 供儀 $\vee$ や $\wedge$ 聖なるもの $\vee$ の中にエロティシズムの運動を見い出した。ナロードニキの人々は、その換わりに $\wedge$ 革命 $\vee$ の中に、 $\wedge$ テロリズム $\vee$ の行為の中に、エロティシズムの情動を放射していたと云えるのではないだろうか。いみじくも、「ロゴス」の人マルクスは、彼らを称して「絶対を夢見る人々」と呼んだ。だがわたしに云わせれば、その $\wedge$ 絶対 $\vee$ とは、自らの存在を死に賭することによってもたらされる失われた存在の連続性の奪還に他ならないのだ。

エロティシズムの彼方には、その究極的状态としての至高の死が待っている。生の中にあつては、不可能の、不可視の磁場である存在の連続性が、エロティシズムによる存在の奥処への照射によって、生の中で保たれていた禁止は侵犯され、乗り越えられ、死によって開示される。

パッションの自己運動とは、かかるエロティシズムと死の連環の裡にある。パッションの自己運動の過程にあつて、対象との距離がエロティシズムによって加速され、接近した時、存在は恐怖と歓喜に引き裂かれながら、死を凝視しなければならぬ。生は今、落下して行き、死

は直立する。なぜなら死こそが失われた存在の連続性を開示するのだから。そして次のような認識が生まれて来る。

「健康な人間にとって、おそらく一等緊急な必要は『死』の思想だ」

(三島由紀夫『鏡子の家』)

「おれを支えていた情熱、おれを支えていた基本的なウル・ロジックは、かつての情熱や原理と等質のものだった。『死の情熱』としか命名しようのない、一つの混沌だった」

(高橋和己『散華』)

「死」それは如何に壮重な、しかも、親密な重みを持って現代に響き渡るだろう。死は、青年の胸に甘美な、粗暴な、陶酔の歌を奏でる。現代はまだ死時代なんです」

(埴谷雄高『死霊』)

わたしはこれらの共通した死の告白を、三島由紀夫のように、「日本人のころ」(注3)と云うのはよそう。

やはり死によって開示される失われた存在の連続性への憧憬と云おう。なぜなら、死の形而上学の射程こそエロティシズムの象を顕現しているのだから。

エロティシズムは人間に普通の意味での幸福などもたらしはしない。エロティシズムとは、不可能性の消費の賭けの、喪失の表象なのである。バタイユは云う。「エロティシズムは残酷だ。悲惨に至る道だ」(注4)と。だがしかし人間の営為の原質たるパッションを支えているのはかかるエロティシズムに他ならないのだ。わたしはエロティシズムと死の連環を構造とするパッションを根底的視座として、 $\wedge$ 人間 $\vee$ をみつめようと思う。わたしの裡にあつて、 $\wedge$ ロシア・ナロードニキの人々もかかる呪縛の裡にあるのだ。だからわたしにとって、彼らの物語とは、 $\wedge$ 革命 $\vee$ と云う対象のもとに、パッションを完全燃焼させて死んだ人々の物語なのだ。

パッションと云う根底的視座から視れば、 $\wedge$ 革命 $\vee$ のために死んだロシア・ナロードニキの人々も、天皇を信じて $\wedge$ 戦争 $\vee$ のために死んだ日本の人々も、 $\wedge$ 神 $\vee$ のために殉教した人々も、恋愛で $\wedge$ 女 $\vee$ のために死んだ人々も、わたしにとってはすべて同じ存在なのである。わたしにとって問題なのは $\wedge$ 人間 $\vee$ に他ならないのである。

「バトス」の領域から見た $\wedge$ 人間 $\vee$ なのである。

ロシア・ナロードニキと云つても広範な領域にわたつてしまいが、わたしが考察しようと思うのは、キャリアエフとネチャーエフである。ひとはこれを奇異に思うかもしれない。キャリアエフは社会革命党のテロリストで、「詩人」という仇名を持つ「心優しい殺害者たち」(注5)の代表的人物であり、ネチャーエフは狂信者、陰謀家と非難され、罵倒される革命家であり、ロシア革命史上における陽面と陰面、ファウストとメフィストフェレスのような関係にあるが、 $\wedge$ 革命 $\vee$ と云う対象に殉じた人間として、両極に引き裂かれながらも、 $\wedge$ 革命 $\vee$ に向けるパッションは、両者とも高みに存在する。エンツェンスベルガーがこんなことを書いている。

「一方においてキャリアエフ、他方においてアゼフが、これらの歴史的瞬間の二つの極端な可能性を、極限的な実存の企てを、体现している」

(『政治と犯罪』)

わたしはこのアゼフをネチャーエフと置き換える。この二人を回転軸として、エロティシズムと死の連環の構

造を有するパッションを根底的視座に据え、△革命▽と云うひとつの対象に殉じた行為を、△テロル▽△愛▽△悪▽を通して論じてみようと思う。

△I章への注▽

- 1 ランボー『地獄の季節』
- 2 ベルジャール『ロシア共産主義の歴史と現実』
- 3 『林房雄論』
- 4 『有罪者』
- 5 カミュ『反抗の人間』

△付 記▽

エロティシズムにおける連続性の瞬間とは次のようなものではあるまいか。△つねにまだ来るべきものであり、つねにすでに過ぎ去ったものであり、またつねに息をのませるほどけわしい或る端初のうちに残存しているもの、しかしまた、永の回帰永のくりかえしとして展開するもの▽

(モーリス・ブランショ『来るべき書物』)

(三回に分載)

群馬の第一回メーデー

水沼辰夫らアナキストの唱道によって、一九二〇年に第一回メーデーが東京上野公園で敢行されたことは有名である。のち横浜や大阪など各地でひらかれるようになった。

群馬で第一回メーデーがおこなわれたのは一九三二(昭和七)年である。五月二日付『上毛新聞』は大見出しで次のように報じている。

「警官隊と衝突」

五十余名検束さる

前橋市中行進も物々しい警戒

昨日メーデー労働祭

当日九時半、前橋新公園広場に五〇〇余名の労働者農民があつまり、警官隊と大乱闘になった。おもな参加団体は次のとおりである。

全国労働組合同盟・前橋労働組合(アナ系)

総同盟前橋・藤岡・伊勢崎・高崎各支部

日本農民組合勢多支部

全国農民組合群馬・勢多各支部

農民組合にくわわった大島英三郎も検束された。

なお、国府ではメーデーに参加する途中の労働者が、駆つけた警官隊に予備検束された。

清水過渡期論批判

先般一同志より清水修一君の「過渡期国家論」なるパンフレットを入手し、拝読したが、実質的に基本的内容はリベルテール誌上に見られる同君の「過渡期論」と同等と考えられるものである。両文共に其の内容は、現在の無政府共産主義戦線力量不足と弱体化を原因とする若年層無政府主義活動分子の間に蔓延・浮上して来ている所の、「戦争路線コンプレックス」を如実に表現しているものであるから、此処で根底的に批判を加え、同時に對置すべき「過渡期論」の要点に若干触れておきたい。しかし批判の対象となると言う事は、フーテン的「共同体」ゴッコ等につつまぬかす部分と違い、それなりの前進・成果が期待されるが故であると言う事を充分考慮して読んでいただきたい。とにかく同君の現在の水準から来る方向性に、大きな危惧を感じ、此の文を提出した訳である。

まず最初に決論的に言っておくならば、此れは国家論を持たぬ革命論である。そしてそこに表現されているものは、大言壮語で小供じみた「マルキシズム世界革命戦争ゴッコ」と、自己にとっては痛くもかゆくもない他者

高 田 克 穂

の苦痛を御題目とする「世界窮民コジキ革命論」に対する焦りと憧れとコンプレックス以外の何物でもない。此うした「ウラミ・ツラミ的世界窮民コジキ戦争ゴッコ路線」などは、無政府共産主義とは全く無関係なものであり、此うしたものに左右されたりコンプレックスを感じたりする必要は全く無いのである。

それでは以下、リベルテール誌上の清水君の過渡期論の順序に従って批判を試み、同時に無政府共産主義革命過渡期の問題の要点にのみ若干触れていきたい。

革命において過渡期が存在すると言うのは、全く正当であり、事実である。そして所謂社会主義がブルジョア社会の延長であると言うのも全く正しい。

しかしブルジョア国家の打倒が革命では無いのである。ブルジョア国家とは即ち所謂自由資本主義国家である。だが此れとは本質的に異なる所の国家資本主義国家はどのようなだろう。確かに此の所謂社会主義国家は、資本を普遍的内容とする限りに於いてブルジョア国家の延長であるが、国家を絶対的普遍とする所の国家性に於いて

は、全く異質の存在であり、国家を規定している諸条件、諸要因等は、清水君の言う所謂ブルジョア国家とは異なるものである。

此処まで述べて来た部分を見ると、あたかも「用語」にこだわっているかに見えるが、問題は此うした用語の内に表現されている内容なのである。高次・低次の共産主義等と言う表現にも表れているのであるが、用語に於いてだけでなく、其の概念そのもので、無意識的にではあるが、マルキシズムの諸概念を受容しているのである。だからこそ、其の範中でしか分析を為し得ず、その故に「国家」が見えていないのである。しかも此れ等の用語は、無規定・無内容でありながら、はなはだ耳触りが良いから、なおの事始末に悪いのである。

無政府共産主義革命とは、政治を廃絶する為に政治に関わるという、悪しきパラドックスではあるが、其ことで打倒すべきは「何々国家」ではなく「国家」そのものである。

批判すべき第一点は以上に見られる様な、極めて不十分な清水君の国家分析、そして其の原因であり、かつ結果である所の、無意識的にはあるが、マルキシズム的諸概念にとらわれた、其の範疇での国家规定・国家観である。そして同君の「過渡期論」全体を規定している

のも此れ等のものである。

革命段階で廃止されるのはブルジョア国家のみでない事は、前記の事から自明である。そして必死の反乱を組織するのが、ブルジョアジーのみでない事もあきらかであり、さらに人民の独裁がプロレタリアートの独裁と同等でない事は言うまでもない。しかし此れ等の、先に述べた事でケリのついている事は置くとして、清水君によるとブルジョア国家の廃止された後も、人民の権力と言う国家機能が残存すると言う。しかし事實は違うだろう。ブルジョア国家に代って「革命国家」が出現するだろう。何故なら、ブルジョア国家のみが国家一般ではないからである。ブルジョア国家の打倒が、安易にソヴィエトやコミューンに結びつくと考えるのは楽観的に過ぎると言わざるを得ない。

「半国家」とか何とか言う。内容の無い耳触りだけ良い抽象的用語を持って来た所で、本質的には何の解決にもなりはしないのであり、此うした方向が出て来るのも、先に述べた規定要因によるものである。

それでは此れに對置すべきは何か、であるが、展開は止めておいて要点のみ述べるならば過渡期とは国家一般を廃絶すべく、ソヴィエト、コミューンが生まれながら

も、多くの要因のために成長し得ぬ時期であり、残存反

革命分子を処理すべく、外見的にはコミューンでありながら、実質的には不可視の、遍在的な少数アナキスト精鋭分子の、意志の連合による独裁を行ない、事に処すべき時である。此れによつてのみコミューンは真に成長するのであつて、実体の無い「人民大衆」に対する宗教的信仰は何等用を為さないのである。

「人民信仰」と別れる事によつてのみ、無政府共産主義は、その意義と力を取りもどす事が可能となり、革命を現実のものとして可視化し得るのである。安っぽい人民信仰や人道主義と訣別してのみ、国家一般を視界に入れる事が出来るのである。そして其には「アイヌ云々」等と言うものは入り込む余地は無いのである。

此れによつて世界の質が決定されるのである。清水君にあっては一国の延長上の世界であり、単なる世界政府の出現に終わる質しか有せぬ世界ではない。一国の拡大にしか過ぎぬ世界を獲得するのが世界革命であろうはずがなく、そうしたレベルから世界革命戦争等と言つても、笑止でしかない。闘うために「共産主義」が必要で、それは「低次」の共産主義等と言つてみても、内容の無い抽象的次元規定等は、現実の前には全く無力であり、そもそもその「共産主義」の内容からして存在していない

いのである。

「無政府共産主義」論・「国家」論も無いまま、共産主義や国家に関わる革命の過渡期を語ろうというのが、そもそも間違ひなのである。基本的概念の無いままで、その展開過程を語るのは止めておくべきである。清水君は国家論から再度始めるべきなのではあるまいか。

最後に、此れは全アナキストに言うべき事であるが、「無政府共産主義者には、帰るべき「パリ」も「ウクライナ」も「スペイン」も無い。何故なら、それは敗北したからである」と言うことである。

神話的世界「パリーウクライナ・スペイン」此れ等と訣別せよ。其れは敗北したのだ。それは何故かを問題とせよ。神話に酔った所で現実の国家にとっては痛くもかゆくもありはしないのである。

アナキズム神話との訣別、此れこそ現在のアナキズムに最も必要なものであり、此れを為し得ねばアナキズムは永遠の空論に終るのである。

取り急ぎ書いた為舌足らずなものになったが、いずれ期間をある程度置いて（準備が必要なため）私の無政府共産主義革命論を発表するつもりである。此れは、フー

テンアナキズムや、マルキシズム折衷主義とは全く別の真の無政府共産主義者による新たな運動を準備すべく、同志と共に、一九七四年後半に創刊を予定している「無政府共産主義」機関誌上に発表する予定である。

とにかく人間の一生は一回しか生きられぬ以上、我々にとっての革命も又一回きりでしかない。其れを見据えて、時間に対する信仰等持つ事無く現実を踏まえて、腰

野 火

○クロボトキン記念講演会

二月十日、池袋の豊島振興会館で講演会を開いた。一九二一年二月八日ドミトロフの寒村で死んだクロを記念したのであった、関西、名古屋、長野でもこの十日、十一日を期して活発な行動集会が開かれた。

今さらクロボトキンでもなかなうと言う者もいる。権力主義者、新奇を追う者ならばそんなことも言えよう。しかし、クロを生み、育んだ時代の流れの中で試行錯誤しながらも、その学問と人間の総力をあけて、行き着いた所が僕たちの一つの出发点でなければならぬのだ。個を追及したスチルナー、カリスマ的なバクーニン、クロの蔭にかくれて人間の地理学を書いたルククユ、身一つを社会不正に叩きつけたマラテスタなど、僕たちは

を落ち着けて進む必要がある。無用の焦りを持った所で、事実は変らないのである。

なお此の批判に対する清水君自身の反批判・あるいは他の人からの批判等も拝読出来れば、大変有難い事である。其の場合リベルテール誌上に発表されるのも良いし又私自身に直接送っていただいても良いと思う。

「人間のあり方を追及するものとしてのアナルシズム」は、老子、シャカ、キリスト、トルストイ、ガンジーなどと共に、深められて来た人類学や社会学の成果をふまえて、捕え返さねばならない。未完成の思想であるアナルシズムは、東洋と西洋という地理的な空間を歴史的な時間の上で見直さなければならぬ。こうした道程で、権力こそは人間の奴隷性に基礎をおくものとして排除されねばならない。僕等はクロが推進した自然科学的方法も歴史的方法と共にさらに追及して行かねばならないと考える。

○訃 報

黒色青年連盟当時からの同志、島津一郎さんが二月十四日死んだ。喜多方市の爪生祐喜君の敬父も亡くなら

たと、新明君から知らせて来た。御冥福を祈る。

○関口明男君から

竜谷大学アナ研に入りました。ぼくの考え方は今の竜谷大アナ研の方法とはちがうので、今やっている生協運動とはまたべつの方法でやって見るつもりです。……

○杉藤二郎君から

七十回目の誕生日を記念して沼津市内浦三津浜「はまのこ」で座談会を開きます。3月31日午後3時

○古田大次郎の墓参

4月15日1時から青山墓地で古田大次郎の墓参りがある。詳しくは下記へ問い合わせを。

東京都杉並区方南町一の四九の一五常陽コーポ二階六号室

黒色戦線社 大島英三郎

電話 03・322・8717

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和49年3月15日発行 Vo. V No 3

編集兼発行者 三 浦 精 一

発 行 所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)